ま　え　が　き

本号はもともとフィリピン特集ということで編集企画に参加したのであるが，結果的には表題にあるとおり「フィリピン農業特集」ということにならざるをえなかった。それには編集のための時間的余裕があまりなかったことも関係しようが，それ以上にわが国におけるフィリピン研究の現状を反映したものとして考えたほうが至当のように思われる。わが国におけるフィリピン研究者の主要な関心は，よかれあしかれ同国の農業ないし農業問題に集中しているようである。ところで，フィリピン農業の概要については最近宮原幸則氏によって大部の報告書がとりまとめられた。『フィリピンの農業――現状と課題』(アジア経済研究所，研究双書第175号，昭和45年2月）がこれであり，その内容はどちらかといえばフィリピン農業の概括的・基礎的研究といった色彩がつよいのであるが，本号に収録された論文はむしろ当面する農業問題の主要な側面に焦点が当てられている。その意味で，本号は期せずして宮原氏の最近の編書を補足する役割を果たすものとなっている。

巻頭の斎藤論文は，フィリピンの農業金融の実態と問題点を主として金融機関の組織とその活動を中心として分析しているが，その場合，農業金融を性格的に対地主向けと対農民向けに二大別し，政府によって推進される農業金融は地主を対象とする増産政策中心の性格のつよいこと，また対農民金融の中枢をなす農業信用庁―農協金融の線は農村不安の緩和策としての性格の濃厚なことを明らかにしている。フィリピンの農業金融，農協組織についての調査研究は，これまでわが国でもほとんど行なわれていなかっただけに，この斎藤論文は宮原氏の論文「農産物流通と農業信用」(前掲書所収）とともに端緒的な意義をもつものとして数えられるであろう。

つぎの滝川論文は，フィリピンにおける現行の農地改革の内容，進捗状況，問題点を明らかにしようとするものであり，とくに最近の中部ルソンにおける農村社会不安の激化に，この上からの農地改革実施の衝撃が無視できないことを指摘している。また，政府が農民の負債問題，信用問題を解決する能力を欠いているところに，農地改革の実施をきわめて困難たらしめている主要因のあることを明らかにしており，その点で斎藤論文ともふかい関連性をもっているといえる。

第3の家永論文は，フィリピンにおける高収量新品種の導入・普及が稲作経営と関連してどのような影響と問題を提起しているかを明らかにしようとするものである。その場合，高収量新品種のもつ性格が農法的視点に立って解明されようとしている点に同論文の特色がある。筆者はこのような分析の結果，フィリピンにおける高収量新品種を中核とする新農法の成立はいまだ実現に至らず，現在ようやくその端緒的段階に達したにすぎないとみる。たんにフィリピンにおいてのみならず，ひろくアジア低開発諸国において「緑の革命」が喧伝されている今日

この家永論文は問題接近の態度・方法の点ともあいまって検討に値するものといえるであろう。

第4の池端論文は，19世紀中葉におけるマニラ開港に視点をすえ，この開港をもたらした直接の歴史的背景，開港後の外国貿易の推移を多くの資料・文献を駆使して克明に追求し，その結果フィリピンの外国貿易は開港以来イギリスの産業資本の圧倒的優位のもとに，またアメリカ資本の優位のもとに展開してきたこと，さらにその必然的帰結としてフィリピンの農民生産に商品経済が浸透し，砂糖，マニラ麻等少数の商品作物を中心とするモノカルチュア経済が成立した経緯を明らかにする。このようにして19世紀末期に成立したフィリピンのモノカルチュア的経済構造とそこから生ずる困難こそは，今日のフィリピンがいぜんとして解決を迫られている基本問題なのであって，その問題成立の端緒を歴史的に追求された意義はきわめて大きいものがある。本論文で果たされなかった19世紀末のモノカルチュア成立の背後にあるフィリピン社会の内部構造の分析は，将来の課題としてひきつづき完成されることを期待したい。

本号における論文の要旨はおおよそ以上のとおりであるが，他に2点の資料を収録した。一つは平野哲郎氏によるフィリピン糖業の最近の動向に関する資料である。周知のようにフィリピンとアメリカとの特恵的砂糖貿易関係は1974年に打ち切られることが予定されており，それだけにフィリピン糖業の最近の動きにたいして関心がもたれるのであるが，平野論文は最近のフィリピンの砂糖需給状況，砂糖増産計画，需給見通しなどを検討し，将来予想されるフィリピン糖業の問題について一定の示唆を与えている。

また梅原弘光氏はフィリピン大学農学部に提出されたベルナールの修士論文『フィリピン農業発展における地主の役割』(1967年) の概要を紹介しているが，これまでフィリピン地主制の実態を統計的に調査したものはきわめて数が少なかっただけに，その紹介された内容には興味深いものがある。

なお，東南アジア諸国の統計評価作業の一環として，これまでのタイおよび台湾の米生産統計の評価にひきつづき，フィリピンの米生産量統計の評価・吟味を村岡徳人氏が行なっている。フィリピンではここ数年来米生産量の推計数値が政争の具に供されてきているだけに，バランス・シート方式に基づく生産量統計の検討は，注目に値するところである。一般に信頼度の高いものとされている貿易統計ですらがかならずしもそうはいえないところに低開発諸国研究者が銘記しなければならない困難がある。

最後に書評として，宮原幸則編『フィリピンの農業——現状と課題』を濱英彦氏に，第2回人口問題会議の報告書を藤森英男氏にとりあげてもらった。濱英彦氏には多忙なところをとくにお願いして原稿を間に合わせていただいた。また，本号所収論文・資料の作成者たちは，その調査研究に当たり現地の官庁や大学，その他機関関係者，在外公館の方々などに多大の協力を得たことを，この紙面を借りて感謝する次第である。

（滝　川　　勉）